◉史料紹介

個人史から考える日中近現代関係史——伯父の遺品を手がかりに

田宮昌子

はじめに

近年、父方の伯父の遺品の整理を断続的に続けている。遺品の中心は日中戦争従軍に関連するアルバムである。[1]これらの写真をはじめて目にしたのは、一九九四年、伯父の五十回忌の法要の席上で、大量の写真や添書が鮮やかに残っていることに驚いた。以来、日中戦争や昭和史に関する史料として何らかの役に立つのではないかと、劣化・散逸に任せることが気になってはいた。しかし、門外漢である筆者がおいそれと手を出す気にはなれず、十年の歳月が過ぎた。着手のきっかけは、二〇〇四年の正月に帰省した折に、これらの写真の多くは当時の部下であった方[2]が撮影したもので、その方が健在でおられると聞いたことである。それまではそれらは戦死した伯父の手になるもので、ことの詳細は永遠に明らかにすべくもないものと思っていたが、そうと知って、相当な高齢になっておられるはずの、その撮影者を訪問すること、そのためにはアルバムの整理作業が必要になることなどを漠然と考えていた。そうこうするうち、その年の夏、たまたま北京でアジア杯サッカーの決勝に居合わせ、帰国後に日本の反応に触れて、日中のコミュニケーション・ギャップの大きさにショックを受けた。こうして、翌二〇〇五年の終戦六十周年に何もしないというのは怠慢ではないかと考え始めるようになった。この二つのきっかけによって、この作業は始まった。しかし、一昨春ようやくその方を訪ねた時には、すでに病床に伏しておられ、肝心な話は聞けぬまま、お亡くなりになった。着手の遅さを悔やみつつ、自身も病を得て、大変な重荷を解いてしまったという感覚に襲われつつも、遅々とした作業を続けている。小稿では、まず中間報告として、写真資料を中心に遺品の紹介を行いたい。[3]

伯父と姪、豊橋陸軍教導学校と愛知大学

タイトル中の伯父とは、この場合、父の長兄である田宮圭川を指している。筆者はこの人物と同じ家に生まれ、家族としての記憶を持っている。物心ついた頃から今日に到るまで、居間の仏壇には伯父の軍服姿の遺影が置かれており、毎朝ご飯とお茶を供えて手を合わせるのが子供の頃の日課だった。両親が伯

父を「兄さん」と呼ぶため、筆者を含め、四人の兄弟姉妹はみな伯父を「お兄さん」と呼んで家庭生活を送ってきた。幼い頃はこの遺影がずいぶん大人に見えたものである。この遺影にまつわる忘れられない出来事がある。今から二十年余りも前になる大学生の頃、「日本の民家に泊まりたい」という北京からの留学生を家に泊めることになった（当時の中国からの国費留学生は、外国社会の影響を受けにくいようにという配慮からか、あまり若年でない既婚者が中心で、その留学生も四〇代の既婚男性だった）。両親は国際交流などには縁のない暮らしだが、筆者の留学を前にしていた時期であったので、「あちらで娘が世話になるから」と異例の頑張りを見せて、宿泊を承諾してくれた。留学生を家に上げた際、父が両手をつき、畳に額をつけて最高度の出迎えをした姿にも驚かされた（中国人にとっては土下座に近く、彼らは大変困惑する）が、仏壇の遺影が裏返してあるのに気付いた時にはさらに驚き、強い印象を受けた。

筆者が愛知大学に進学し、中国文学を専攻することになると、父はしきりに「うちは中国と縁がある」と口にした。伯父圭川が大学で東洋哲学を専攻し、中国語を学び、少なくとも父の認識においては、「中国に憧れていた」「行きたがっていた」こと、従軍とはいえ中国に滞在していたこと、また筆者の入学式に母が一緒にやって来て、「ここにお義兄さんが居たのだ」と言いながら大学正門で写真を撮り、「うちにも同じ写真がある」と言っていたから、両親は豊橋陸軍教導学校の跡地に愛知大学ができたというように聞いていたらしい（調査の結果、正確にはずれていることが判明）[4]。生家である禅寺の境内には大きな楠が聳えているが、これも「（兄さんが）豊橋（陸軍教導学校）から持って来て植えたのだ。（愛知大学にあるのと）同じ木だ」と言っていた。当時の筆者にとっては、「陸軍」や「従軍」が登場するこれらの話は、全否定さるべき〝戦前戦中の思い出話〟に過ぎず、さらに、父の表現によれば「中国に行きたかったから」「中国が好きだったから」「中国戦線を選んだ」という人物と一緒にされることにも嫌悪感があって、これらのことを追求してみることはなかった。一方、父にとっては、娘が中国語を話すようになり、中国人と付き合って、日中戦争に批判的になるのは快いことではなかったようだ。中国留学から帰って間もない頃、日中戦争を巡って父と論争になり、父が顔を上気させて「兄さんが侵略者だというのか！」と声を荒げたこともあった。こうした中国に対する時の父の矛盾した感情や行動に、近現代日本が中国と持ってきた関係の性質を見ることができるかも知れない。ともかく一九九四年に五十回忌を迎える頃には、筆者もいつしか伯父の享年を越え、子供の頃にはずいぶんと大人に見えた遺影にも初々しさを感じるようになった。それに伴い、その死にも痛ましさを覚え、この人物について知ることから筆者を遠ざけてきた反感も幾分和らいだのである。そして、この年、戦友会が毎年沖縄で行ってきたという三重県出身戦没者の慰霊祭を、五十回忌を区切りに最後とするとのことで、遺族であり住職でもある父に法要の依頼があった。それまで親族は誰も沖縄に脚を運んでいなかったが、これ

を期に当時健在であった父の兄弟姉妹も揃って慰霊に出かけることになった。筆者はこれに同行し、伯父が自決したというガマにも入った。とはいえ、旧軍人に対する筆者の抵抗感は完全には拭い去りがたく、また戦争の記憶の消失に対する切迫感も薄かったのであろう。当時はまだかくしゃくとしておられた生存者の方々とは一定の距離を置いたまま、きちんと話をすることもなく、この問題に手をつけるまでにはさらに十年の歳月を要した。

筆者はこの伯父と同じ家に生まれただけでなく、他の兄弟姉妹より奇縁に恵まれることとなった。地元の同じ高校（伯父の時は旧制中学）に通い、大学は異なるが同じく中国思想や文学、中国語を学んだ。しかも進学した大学は敗戦直後に陸軍施設跡地に創設されたという経緯を持っており、その地はまさに伯父が中国戦線に赴くための訓練を受けた陸軍教導学校が伯父の入学直前まで存在した場所であった（詳細は第二章第二節）。同じ陸軍施設という関係からか、伯父のアルバムに写る教導学校の風景は、旧陸軍時代からの建物が残る愛知大学豊橋キャンパスに学んだ筆者には、既視感を感じさせるものである。

圭川は一九一五年（大正四）生まれ。大正から昭和へと、大日本帝国期を生きた。日本が対中強硬策を採り、武力行使をエスカレートさせて行く時期である。大学では文学部東洋学科に学び、卒業論文では宋代の儒者を研究、日中会話辞書を出版しようとしていた形跡もある。父の記憶によれば、少尉として戦地に赴くに際しては、「北支戦線」を希望したという。仏僧であり、〝聖職者〟として生きる決意を記すノートも残る。一方、父から聞く入隊前の将校への憧れ、アルバムの添書が示す国威発揚の喜びや昇進への意欲……。対中姿勢という面で切り取ってみた際に矛盾を見せる伯父の思想の背景には、近代日本の脱亜入欧の流れと、その一方で東亜同文書院設立に現れるような興亜派や、大衆文化においても大陸浪人が活躍する少年小説を生むような流れがあり、日本の中国への思い入れと実力行使が交錯する政治的経済的文化的背景があるのだろう。

一方、姪である筆者は、一九六一年（昭和三六）生まれ。昭和から平成の日本国期を生きてきた。それは、〝戦後〟と呼ばれる時代であるが、今にして思えば、民主主義教育にしろ平和教育にしろ、戦前の体制や価値観の否定の上にある点で、やはり直接的な戦争の記憶の上にあった時期であり、戦前戦中の事物に対して筆者が長く持っていた条件反射的な否定も時代の刻印だったのだろう。敗戦から約三十年後の七二年に日中国交正常化を成し遂げた後、日中の官民が相当な配慮の上に交流を進めた〝日中友好〟期に筆者は成長し、一九八〇年に大学に進学した。ある調査によると、この年の対中好感度はここ三十年間で最も高い。[5] 大学では中国文学を専攻し、始まったばかりの中国留学に教師や先輩の羨望を受けながら出発した。その年、一九八二年は、いわゆる教科書問題が起こった年でもあり、歴史認識をめぐっての、政治家個人からの〝暴言〟と中国政府の抗議と日本政府の謝罪との悪循環の過程をも目撃して来た。

伯父は、中国での初年兵教育の後に一旦帰国し、豊橋陸軍教

導学校で幹部候補生として訓練を受けた後、改めて中国戦線に派遣されている。以下に紹介するように、豊橋での訓練は中国攻略を念頭においたものであったと思われる。一方、その姪はちょうど四十年後にその〝跡地〟に創立されていた愛知大学に入学した。中国攻略の訓練を行う陸軍教導学校と中国研究を特色として謳う大学。伯父の従軍と姪の留学。同じ場所、あるいは同じ家に生まれた二つの世代に、めぐり遭わせた時代の日本の対中姿勢の違いによって、文武全く正反対の方向性が生まれている。

一　大学生活――大正ロマンの名残り――

圭川は、一九三六年（昭和一一）、駒澤大学文学部東洋学科に入学、三九年に卒業している。駒澤大学編纂の大学史では、三一年以降を「学問の場を奪われ、暗闇の時代へ」と紹介している。[6] 残された受講ノートを見てみると、仏教学、中国古典、中国語、国学などの他に、英語やドイツ語も履修、欧州の文学や哲学思想関係の受講も多い。駒澤大学には、取得単位の記録や卒業論文が残っていた。閲覧が可能かどうか問い合わせたところ、遺族に返還するとして郵送されてきた。卒業論文の題目は「周濂渓の学説概論に就いて」。周濂渓は周敦頤（一〇一七―七三）の号。宋学の創始者とされるが、その思想には道学に加え、仏教（特に禅宗）の影響が指摘されており、東洋哲学を専攻する禅僧らしい関心と言える。論文自体は、宋学の位置付けに始まり、周敦頤の略伝、その学説の概略と続き、概論的な内容に終始しているが、伝統的な漢学とは違い、インドやギリシャの古典哲学、西洋近代思想にも言及するところは、明治以降の〝近代的〟大学における東洋学教授のあり方を反映するものなのだろう。また、周敦頤の居住の地を示す手書きの地図を見ると、海外に渡る経路が限られていた時代に、中国に渡れるということ、揚子江や黄河、万里の長城の地に立てる（アルバムには現地で購入したと思われる土産写真や絵葉書も多く残る）ということの意味も現在とは大きく異なるものであろうことにも気づかされる。

郷里の家には十数冊の大学ノートが残る。その中には、日中会話辞典の原稿様のものがある。実に簡単な単語の対照であるが、『実用日支小辞典』という書名らしき名に「昭和十一年五月二五日了」と添えられ、大阪市の出版社名が書かれている（写真1）。しかし、昭和一一年と言えば、大学一年生の五月に当たる。入学したての一年生が辞書を出版できるとも思えない。これについては、目下これ以上のことは不明である。何か興味深い発見はないかと、残されたノート全冊に一頁ずつ目を通してみたが、小さな字で丁寧に書き込まれた筆記や、余白に

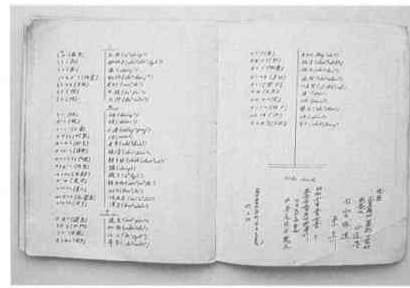

写真1　『実用日支小辞典』原稿

残る細かな出納記録などからは、几帳面な性格が窺われた。講義内容は、日中戦争開戦の前後であるにもかかわらず、学術的非政治的であり、中国の言語や思想について、また西洋の哲学や教育について、あるいは、日本の天皇制や憲法などについても、その講義に国粋主義的な歪みは特に見られない。この点は後に見る新聞記事の論調とは異なる。戦中もアカデミズムの中では非政治的である〝自由〟はあったということであろうか（ただし、新聞記事の方は太平洋戦争開戦後のものであり、政治状況の違いもある）。

従軍後の写真量には遠く及ばないが、それ以前に比せば、大学からは写真もぐんと多くなり、学友との記念撮影や下宿先の家族との写真などが社交的な学生生活を窺わせる。「京都済門青年会支部駒澤大学微妙会」における活動を示す写真もあり、何らかの宗教活動を行っていたようだ。駒澤大学は禅宗曹洞宗であるが、臨済宗（自身の所属宗派）の会派が組織されていたらしい。圭川の大学時代の関心は仏教と中国語と儒学に集約できるように思われる。

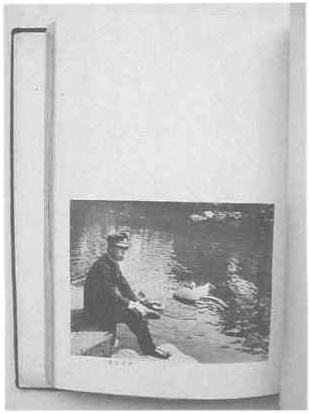

写真２　駒澤大学卒業アルバム

駒澤大学の卒業記念アルバムと思しき写真帳の表紙には、ほどなく敵性語となる英語で「Our Life at Komazawa」と題されている。キャンパスの芝生や池の畔で思い入れたっぷりのポーズをとる学生たちの姿には、大正ロマンの残影がある（写真2）。しかし、戦時色が全くない訳ではなく、年に一度実施されていたらしい学部の「戦史旅行」には配属将校も同行し、学生たちもゲートル巻き姿である。「暗闇の時代」（駒澤大学史）と大正デモクラシーの余韻が奇妙な同居を見せるキャンパスライフである。

二　軍隊生活――「勇躍征途ニ就カントス」――

圭川は、一九三九年一二月に入隊、四五年六月二六日に「沖縄本島米須方面にて戦死」とされている。沖縄守備の最高司令官であった牛島中将の自決、いわゆる「沖縄戦における日本軍の組織的抵抗の終了」から三日後、本人の三十歳の誕生日に当る。父によれば、敗戦後しばらくしてからようやく戦死公報が来て、次兄と檀家総代が入隊部隊に遺骨を受け取りに行ったが、渡された木箱に入っていたのは名前と階級を書いた紙切れのみだったという。親族には、元部下の話として、中隊がほぼ潰滅した後に手榴弾で自決と伝わっているが、正確なことは確認できていない。当然ながら軍隊手帳などは残っておらず、詳細な軍歴は不明である。防衛省防衛研究所に照会したところ、

戦没者の記録を扱う地元自治体の担当課を紹介されたが、入手できた「軍歴証明」はごく簡単な内容で、しかも本人の遺品から確認できる事実とは異なる点が多々ある、至極心もとないものであった。担当者によると、戦中の記録は敗戦時に処分されており、現在ある記録は戦後になって遺族に聞き取りをして作成されたものらしいと言う。このような状況から、本人が中国大陸から沖縄に転戦する際に生家に送付したアルバム等から筆者が再構成した以下の内容が現時点では最も詳細な記録となる。[8]

(一) 入営から初年兵教育

入営は、一九三九年（昭和一四）一二月一日、歩兵（中部）第三十八部隊。[9] その記念と思われる写真には「勇躍征途ニ就カントス」と書き添えている。アルバム4「支那事変記念写真帳」に転載されている『三重日報』記事には「われらが野田部隊、暴支膺懲の征途へ」「山田部隊新精鋭　勇躍！征途に上る」などの見出しが躍る。これらの表現を踏まえると、当時「征途」というのは、ほとんど「暴支膺懲」と同義のように使われたようだ。この添書を書き付けるに当って、当人がどれほど自覚的であったか定かではないが、潜在意識においてはおそらく大きな距離はなかったのではないかと思われる。

同三九年一二月末に南京に到着の後、漂水[10]の第一機関銃中隊に入隊、そこで初年兵教育を受けている。その期間の写真への添書の一部を拾ってみると、「銃後の熱誠こめた慰問袋を手にしてニコ〳〵部隊」「此ノ鐘ノ音コソ今尚耳ニ響イテ……」「吾等ノ家ハ吾等ノ手ニテ美シク！！ヲモットトートシ……」などとある。それらには潑剌と弾むような調子があり、まるで合宿訓練を楽しむ体育会系学生のようである。体験者の回顧に現れる初年兵時代というものは決まって古年兵の苛めに苦しむもので、大卒などであれば、よりひどい苛めに遭うものだったという。しかし、圭川は写真と添書によって、中隊の様子を事細かに記録しておこうとしており、アルバムが伝える限りでは、訓練期間は本人にとって誇らしく懐かしい記念すべきものであったかのようである。軍での所属は、初年兵訓練期間中には「第一機関銃中隊」、陸軍教導学校での訓練期間には「学生隊機関銃隊第四区隊」、山西省での駐屯期間中[11]にも機関銃小隊のものと思われる集合写真が、戦死の地となる沖縄でも、「機関銃中隊」の記録が見える。[12] こうしたことから、ほぼ一貫して機関銃

写真3　幹部候補生に選ばれ、入隊以来を回顧する頁

隊所属であったようだ。

写真3は、初年兵教育を終え、幹部候補生として豊橋陸軍教導学校に入学するために一旦帰国する途上で撮影されたもの。[13]「回顧!!」と標題をつけ、郷里の部隊への入営から一年に満たない軍隊生活での昇進の記録を事細かに列記している。「突如甲幹（筆者注＝甲種幹部候補生）発表サル」「第一機関銃中隊ヨリ選バレシ……」などの表現には、軍隊での昇進への意欲や誇りが窺われる。参加した〝討伐〟の記録も見える。

(二) 豊橋陸軍教導学校にて

前述したように、当初は豊橋陸軍教導学校が現愛知大学敷地にあったものと考えていたが、調査の結果、教導学校は一九二七年六月に現愛知大学敷地に開設されているものの、三九年に予備士官学校が併置され、翌四〇年一一月にそれと分離する形で三、四キロ東の市内西口町に移転していることが分った。[14] 圭川が入学するのは、その直後の一二月一日である。アルバムにある昭和一五年一二月二一日付の「地鎮祭」や「落成式」写真の意味が分らなかったが、ようやく謎が解けたのであった。教導学校正門は、記憶の中にある愛知大学副門と同一のものに思えたが、実際に現地を再訪して確認してみると、門の形状も門内に続く地形も明らかに異なっていた。[15]

教導学校生徒集会所には「□□支那大地図」（年代不明）が掲げられており、この教導学校での訓練が中国大陸での戦線を想定したものであったことを示している。訓練期間中の写真ほぼ全てに「豊橋陸軍教導学校　学生隊機関銃隊第四区隊　田宮圭川」という印が裏面に押されており、これが所属を示すようだ。その訓練内容であるが、北中国を思わせる地形での行軍、渡河（写真7）、架橋（写真8）などの訓練が行われている。渡河訓練が豊川で行われているのを始め、余暇の様子（写真9）も含めて、写真には牛川、二川、向山、高師など、筆者にとっても馴染みのある豊橋周辺の地名が頻出する。「鬼の天伯　蛇の高師　流す涙は梅田川」。添書にはこんな狂歌もあった。添書は概して深い感情を推し量ることが難しい簡潔なものであるが、射撃訓練の写真に添えて、珍しく長い文章がある。「アノ広漠タル天伯高師原ノ野ヲ　汗ト塵ニマミレ乍ラ日夜駆ヶ廻ッタ　此ノ処ニ於テ　流ス汗コソ戦場ニ於テ流ス血ヲ節約スルコトナリ」。四十年後には姪が中国語の発音訓練をしながら、あるいは中国からの留学生との交流を楽しみながら、平和な大学生生活を送ったその地で、伯父は中国大陸攻略のための厳しい訓練を受けていたのである。

圭川は約八か月半の訓練の後、翌年七月に予備役将校課程を卒業。帰省時に、卒業記念として豊橋から楠の苗木を持ち帰り、生家の境内に植えて、中国に出征したという。現在も境内に聳えるその楠は、愛知大学キャンパスに茂る楠の高木と心なしか樹相が似通うように思われる。

(三) 中国戦線にて

圭川は一九四一年の教導学校卒業に伴い少尉に任官。父によ

写真４　豊橋陸軍教導学校　正門

写真５　豊橋陸軍教導学校　兵舎

写真６　豊橋陸軍教導学校　将校集会所

写真７　渡河訓練（豊川にて）

写真８　工兵隊による架橋作業

写真９　教導学校訓練中の余暇
（豊橋向山公園と向山動物園）

るとその際に「北支」派遣を希望したという。三重県の記録には「少尉　予備役編入。同日　独立歩兵第14大隊に応召」とある。[16] 少尉任官記念と思われる写真には「北支那派遣」と裏書きされている。「北支」派遣後は、四一年一二月に山西省陽泉の旅団本部で新任将校集合教育を終えている。その後、「北支派遣力第三五九五部隊尾坂隊」に配属されたらしい。[17] 四三年九月に中尉に昇進しており、同時期から写真の署名には「石三五九一部隊田宮隊」が登場する。

関連文献[18]を総合すると、この部隊は、四一、二年当時は、独立混成第四旅団（司令部：山西省陽泉）独立歩兵第十四大隊（司令部：山西省盂県）で、「力三五九五」は通称号、「尾坂隊」は中隊名である。四三年六月に「北支那方面軍」の改編があり、第一軍第六十二師団（司令部：楡次）歩兵第六十三旅団（司令部：陽泉）独立歩兵第十四大隊となり、通称も「石」に変わっている。「三五九一」は、歩兵第六十三旅団の通称号である。翌四四年には、第六十二師団は六月の米軍サイパン上陸を受けて、サイパン支援のために「支那派遣軍」から抽出されるが、サイパン玉砕によって、七月には台湾軍司令官隷下の第三十二軍に編入。開封に集結後、南下して上海から出航、八月一九日に沖縄本島那覇に上陸している。

軍人として

仏僧も教員も当時は聖職とされた職業である。その両者であった青年は、戦地でどのような軍人であったのだろうか。ある集落を見下ろす後姿を撮らせた写真（写真10）には、「説明ヲ聞ク我輩」と裏書きされている（本人は右脇）。大陸を駆ける馬賊に自身をなぞらえでもしただろうか。他者の地を征服することに一種のロマンを感じていたのではないか。多くの写真の中でもとりわけ衝撃を受けた一枚である。また、双眼鏡を首にかけて高台から周囲を見渡すポーズに「遥か敵を睨んで」「僕ノ勇姿」（写真11）、入浴後の褌姿には「サー来たれ　この太った身体を見よ」とある。これらは前後の日付から「北支」派遣二年目に当たる四三年ごろ、山西省の駐屯地での撮影と見られる。軍隊生活や武力行使への疑問や苦痛が潜んでいないかと探してみるのだが、これらの写真は戦闘意欲や敵愾心を示すばかりである。

戦地の日常

アルバムには自室で酒を飲んだり（写真12）、草むらに寝転んだり、兵舎の内外で寛ぐ多くの写真が堂々と貼られている。散髪姿から褌姿、果ては食堂のメニューのアップまである。さらに「オーイ　写真屋　コノポーズを一つ撮ってくれ」「秋の漫歩　……　誰も話し相手は居らぬかなー」（写真13）など、暢気でやや自己陶酔的な台詞が書き付けられている。枚数が多いことも戦地とは思えない余裕である。

日本軍人の中国服姿

枚数は多くはないが、中国服を着ている写真が、本人あるいは日本軍人と確認できるものだけでも数点ある。中には、衣服から帽子や靴まで全身を中国式で固めた日本軍将校たちの、いかにも記念写真という一枚もある（写真14）。服には折り目が

写真10　裏書に「説明ヲ聞ク我輩」。山西省盂県周辺の村落と思われる

写真11　裏書に「僕ノ勇姿」。高台から周囲を見渡す。首には双眼鏡

写真12　裏書に「僕の部屋　"一寸一杯美味いゝ"」（1943.8下旬）

写真13　裏書に「"秋の漫歩……誰も話し相手は居らぬかなー"」

はっきり見えるので、仕立てたばかりであろうか。撮影地点は、裏書によると東会里という山西省盂県の村の「村公所」前。前後の写真との関連から、写っているのは東会里警備隊員であるらしい[19]。同じ大隊（独立歩兵第十四大隊）の生存者に日本兵が中国服を着ることについて尋ねてみたところ、「日曜なんかで遊びに行く時、作戦に行く時も中国の服を着てカモフラージュして。中国人が着とったやつを貰ったり。兵隊さん（筆者注＝日本兵）と仲良くしておったりしたら、（筆者注＝現地の人が）持ってきてくれる[20]」と返ってきた。圭川には、具体的状況は不明であるが、裏書に「1938.10.17 in Komazawa」とあることから、駒澤大学時代に撮ったと考えられる中国服姿の写真もある（写真15）。一般の兵にとっての中国服は、街に偵察に出たり、遊びに出たりする際の実用的なカモフラー

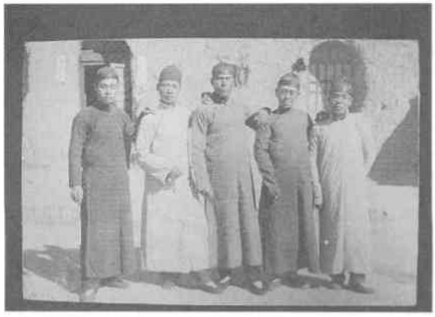

写真14　東会里村警備隊の中国服姿。裏書「□□兵長　□□伍長　□□軍曹　田宮少尉……於東会里村々公所」(1942.10.26)

写真15　駒澤大学時代の中国服姿(1938.10.17)

写真16　裏書に「□□伍長　使用苦力ト共ニ……東会里警備隊ニ於テ」。肘掛け椅子、指には煙草、卓上には蓄音機と茶菓子（1942.10.26）

写真17　苦力を伴って村の道を歩く日本軍人。背景に壁を周囲に立てた富裕そうな農家。その壁にスローガンらしきもの

ジュであったのであろうが、大学出のインテリ兵[21]にとっては、それとは別次元の遊びや憧れでもあっただろうか。

現地住民との交渉

写真には日本軍人が現地の住民を従者に付けている様子も写っている（写真16・17）。また、親子三人と思われる写真の裏面には「田宮隊長大人惠存　股長李□□敬贈」とあり、現地の住民組織の代表から家族写真を贈られていることがわかる。この「股長」というのは、続く写真（写真18・19）の裏面に「東会里差務股長　維持会長」とあることから、日本軍側からは「維持会長」との位置づけだったのであろう。維持会とは、日本軍が占領支配地域で組織した治安維持組織で、駐屯に必要な物資を供出させる際の窓口でもあった[22]。裏書には会長以下維持会員と思われる八名の中国人名が並ぶ。圭川は大学で中国語を学んでいるが、住民との日常のやり取りは具体的にはどのように行ったものであろうか。

女性たち

アルバムには、現在の戦中イメージか

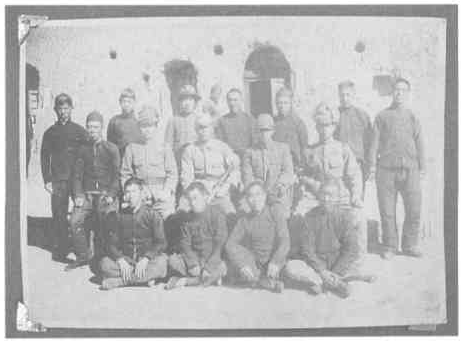

写真18　維持会員の集合写真。東会里村の村公所前にて

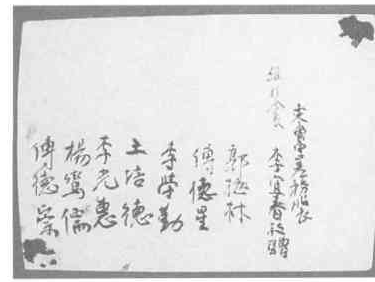

写真19　写真18の裏面。「東会里差務股長　維持会長　李□□敬贈」の署名

写真20　アルバム5見開き。女性の写真と自身の写真を対にして貼っている

写真21　チマチョゴリの女性
裏書に「朝鮮女子風俗」

らは意外であったが、女性の写真も少なくない。女性の写真と自分の写真を対にして貼っている箇所もある。写真20は中国風俗を写した写真を集めた頁であるが、チマチョゴリ姿の若い女性の写真（写真21）の下に学生服姿の自分の写真を配している。裏書には「朝鮮女子風俗」とあるが、この可憐な女性は一体どのような女性なのか。以下は、中国戦線での写真の中に現れる女性たちである。舞台化粧のような濃い化粧を施した女性（写真22）はアルバム3「支那事変記念写真帖」からである。慰問団の女優であろうか。B4版ほどの大判の頁の中央にただ一枚貼られており、〝皇軍〟の偉業を讃える前後の頁と異様な断絶がある。写真23は裏書に「支那女子風俗」とある。衣服は上下とも柄が入り、髪にはパーマを当てている。入り口付近の様子は孟県の「松の家」（写真26）に似ている。慰安婦かどうかは不明であるが、集落の農村女性を写した他の写真（写真24など）と比べると、この女性の身づく

写真22

裏書なし。舞台化粧のような濃いメーク
慰問団の女優であろうか

写真23

裏書に「支那女子風俗」。他の写真に写る
農村女性とは身なりが明らかに異なる

写真24　裏書に「支那部落民」
民家の婦人と子供たち

写真25

裏書なし。女性は手ぬぐいを被り、和服に
割烹着姿。隣の足元は草履履き

ろいの様子は一般の農婦とは明らかに異なっている。写真25は、手ぬぐいを被り、和服に割烹着姿。隣の人物も和服らしく、足元には鼻緒が見える。将校用施設の前かと思われる写真（写真27）に続いて貼られており、外装が似ていることからも同施設の内部であるかもしれない。

慰安施設

アルバムには、慰安施設におけるものと思われる写真もある。写真26は「孟（ママ）県ノ松の家クーニャン」と裏書がある。三人の女性は割烹着姿に見える。外壁の様子は、次の将校用と思われる施設と比べるとかなり粗末である。写真27には裏書がなく、撮影地点は不明であるが、「松の家」とは違い、しっかりした建物である。女性たちの右側に立つのは将校と思われるので、将校用の施設であろうか。女性二人は和服に割烹着姿。右側の女性の足元には鼻緒が見える。左側の女性は風呂敷包みを抱えており、日本風俗が行われている。[23] 写真28は、「戦地ニ於テ

写真26　裏書に「孟（ママ）県ノ松の家クーニャン」割烹着姿の女性三人と

写真27　裏書なし。将校用の施設か。右側の女性は草履履き。左側の女性は風呂敷包みを抱えている

写真28　裏書に「戦地ニ於テ　"同期生ノ集ヒ"」。床の間に畳敷きの和室。和服の女性が二人（1943.6）

写真29　裏書に「□□少尉ト共ニ　亀ノ家旅館ニ於テ」（1943.6下旬）

〝同期生ノ集ヒ〟（裏書）。床の間に畳敷きの和室、真ん中には和服の女性が二人。裏書は写真29と同年同月であるので、同日の撮影であるとすると、亀の家旅館の内部であろうか。その写真29は「□□少尉ト共ニ　亀ノ家旅館ニ於テ」（裏書）。入浴後であろうか、浴衣姿で寛いでいる。

㈣　従軍記念品の数々

「支那事変従軍記章」をはじめ、勲章や感状（戦功への賞状）、従軍記念写真帳など、遺品の多くは軍から支給された従軍の記念品である。アルバム3「支那事変記念写真帖」（写真30）は、B4版ほどの大判で、多くの写真を印刷した頁に加え、巻末にはスクラップ用の無地の頁がある。印刷頁の前半は「司令部」「砲兵隊」「通信隊」……と軍の各機構を写真をふんだんに使って紹介。後半は、軍事行動の全過程を紹介するものと思われ、「戦闘の準備」「行軍」「戦闘」「占領」「入城」「駐屯」「慰問」「宣撫工作」（写真31）「建設」「偉業の完成」（筆者注＝〝皇軍に慕い寄る〟現地住民の様子）の項目が立てられている。これらも豊富に写真を使用してい

写真30　アルバム３「支那事変記念写真帖」表紙

写真31　アルバム３「支那事変記念写真帖」「宣撫工作（其の一）」

写真32
アルバム７「回顧」。1941年７月発行の支那事変四周年記念品（絵葉書帳）。全冊がタバコパッケージのコレクションで埋められている

る。どの範囲までに支給されたものか不明であるが、かなりの制作費をかけたものと思われる。奥付には「昭和十五年五月〔非売品〕」とある。圭川は印刷頁の裏面に自身の従軍中の写真をびっしりと貼り付け、またスクラップ頁は「晋冀豫区南部大行作戦記録写真」などと銘打った自作の写真集となっている。

また、表紙に「回顧」の文字と中国式城門の前で銃剣を構える兵士の絵を配した絵葉書帳もある（アルバム7）。扉頁には、「この絵葉書帳は国民の熱誠を込めた恤兵寄付金を以て調整したものでありますから、従軍の思ひ出となりますように利用されることを希望致します。昭和十六年七月支那事変第四週年記念」とある。圭川の場合、「従軍の思ひ出」は何だったのかというと、全篇がタバコパッケージのコレクションである（写真32）。パッケージの表裏・側面を丁寧に切り貼りしており、大変な熱意が感じられる。パッケージに印刷された地名は、青島、太原、天津、北京……と北中国が中心であり、実際に自身が現地で入手したものと思われる。

「支那事変」、あるいは従軍自体が「記念」の対象であったことは、戦後世代の筆者には実感

としては伝わっておらず、こうした具体的な有り様はやはり驚きであった。こうした記念品の数々は、高揚感や晴れやかさを基調とし、「憧憬」「痛快」「懐しい」「幾多の思出」……という語彙[24]を散りばめる。これらからは、当時、従軍というものが青年期の試練や冒険、さらには異国体験というような位置づけを持っていたのではないかと思わせられる。生存者も、満期になって帰ってくる時には記念になるものはできるだけ持たせてもらえた、それが叶わなくなったのは米国が参戦して圧倒的な火力にやられるようになってからで、敗戦に出くわした者は身一つで帰って来たという。当然ながら戦地での現実とはまた別であるが、米国の軍事力によって日本本土が悲惨な被害を蒙るまで、戦争や従軍というものに与えられていたらしいこのような位置づけは、少なくとも一般的にはほとんど伝えられていないのではないかと思われる。

三　精神生活——当時の世相と伯父の内面世界——

遺品の中には、圭川が時代に対して考えていたことや戦争への認識を直接に示すような自筆の文章はない。しかし、アルバム3「支那事変記念写真帖」には切抜きされたり、差し込まれた新聞記事が多数ある。これらの記事からは、当時の世相だけでなく、それらを選択した圭川の思想や価値観を間接的に窺い知ることができそうである。

これらのスクラップは記事のみが切り取られ、掲載紙名や掲載日が不明なものが多いが、その中に昭和一八年（一九四三）一二月六日『東亜新報』掲載ということが分かる記事がまとまって残っている。真珠湾攻撃から二年が経とうとする時期のそれらの記事は、勇ましい口ぶりではあるが、国債購入や貯蓄の奨励、増産・献金・献鉄・献血の呼び掛けが目立ち、太平洋戦線の戦局悪化や本土空襲を控えた日本の苦境が窺える。『東亜新報』は、記事や広告（写真33）から、占領下の北京で発行されていた新聞ということが分かる。戦中および終戦直後に中国で日本語新聞発行に携わった安藤達夫氏の回顧録に、『東亜新報』は「対英米戦に備え、大陸在留民指導のため北支軍と北京大使館が株主で昭和十五年発刊したもの。揚子江以北を東亜新報、以南を大陸新報とした」とある。[25]

それら『東亜新報』一二月六日の記事の一つ、「気合を掛けよう」と題する論説は、当時の報道の基調と社会の雰囲気を象徴しているものと思われる。真珠湾攻撃を「米英撃滅の鉾をとって敢然と起ち上った」「アジア十億の、共栄圏民族」の「歴史の元旦」「民族の正月」「アジアの初日の出」と位置づけ、米英を「アジアの「力」を見縊る」「物質主義」と非難、日米の構図を「夜郎自大の自惚れのヤンキー」に日本が「不屈の闘魂」「一億火の玉」で立ち向かうものとする。文中には、「何を小癪な！」というフレーズを印象的な単独行で二回も登場させている。この記事を圭川はアルバム3の扉頁に貼り付けている。「何を小癪な！」は彼にとって大いに共感できる叫びであったのだろう。「征戦二年大戦果」（写真34）も同日の『東亜新報』掲載。「日本を中心とした世界地図」と題した同趣旨

写真33 『東亜新報』1943年12月6日広告欄
付されている住所は北京のもの

写真34 『東亜新報』1943年12月6日
「征戦二年大戦果」

の図が、右の論説文に先行してアルバム3の扉頁に貼られている。同日の記事には他に、満州から大政翼賛会本部顧問が興亜使節として「華北における中国国民の興亜精神昂揚のため」天津を訪問、「天津神社」を参拝という記事や、郷軍北京第五分会が「北京神社」へ必勝祈願という記事などが掲載されている。

また、アルバム3巻末には各地の剿共戦を伝える記事がまとまって挿まれている。たとえば『朝日新聞』の記事[26]は「殲滅的戦果」を誇る言辞を散りばめる。

「直撃弾は逃げ惑う敵の頭上に乱れ飛び山肌は瞬時にして容相を変ずるの凄惨な情景……」「市内は目下黒煙天に沖して燃え上がって」「部落は一瞬にして阿鼻叫喚の生地獄と化した」。剿共戦記事には他も一様に「徹底的」「潰滅」「殲滅」「撃滅」「掃蕩」「覆滅」……「阿修羅の奮戦」「鬼神も哭く奮戦」……と掃討作戦の苛烈さを窺わせる表現が頻出する。

これらの記事の選択からは、圭川が当時の国家戦略および戦争の大義を積極的に支持していたのであろうことが窺える。日本の軍事力が及んだ範囲を版図のように描く戦果要図には、国威の発揚としての軍事力行使に感じていたらしい誇りが見える。中国古典からの引用を散りばめる随筆や漢詩の紹介記事も多く残るが、これらの一見方向性を異にする選択からは、大学で中国の言語や文化について学んだことと、中国で軍事活動を展開することとの折り合いがどうついていたのかという、筆者にとっての一番の関心への手がかりを探すことができそうである。そこからは、王朝期の詩や歴史叙述などの、日本で言うところの中国の〝伝統文化〟については〝東洋の〟文化として肯定し尊重するが、同時代の現実の中国に対しては、「暴支膺懲」の言論や日本による占領を肯定する姿勢は消極的とは言いがたく、日本に指導や懲罰の資格があるとする当時の日本の対中観や対中姿勢をさしたる疑問や苦痛なく共有していたのではないかと思われる。

親元には戦地の伯父から夥しい数の郵便物が届いていたといい、検閲印は自身が押すため、手紙には捕虜に目隠しをして銃

剣で新兵に突かせているなど、赤裸々な戦場の様子も書かれていたという。これらの手紙は祖父母が戦後に廃棄したらしく一通も残っていない。しかし、伯母の嫁ぎ先に届いたためにただ一通残った手紙には、「何時靖国神社に行くか一寸先も見えぬ」「小生の人生観も変わった」などと綴られている。文面から四四年初頭に書かれたと思われる。「北支」派遣から数えてもすでに二年。戦地の現実の中で〝公式見解〟への疑問も芽生えていたであろうか。

むすびに

圭川は、入隊前にごく短い期間だが教員生活を送っている。大学を卒業後、すぐに広島の中学校に赴任、約八か月間、国語漢文を教えている。その間、仏教への関心を持ち続け、何らかの活動をしていたことを、アルバムに残る布教使の名刺や仏教思想に関する書籍のメモなどから窺うことができる。小稿に現れるのはおもに軍人としての姿であるが、大学での専攻やその後の進路を見れば、この青年はもともと職業軍人を目指したものではない。すでに述べたように、何か興味深い発見はないかと、残された講義ノート全冊に目を通したが、小さな字で丁寧に書き込まれた筆記や余白に残る細かな出納記録などからは几帳面な性格が窺われた。平和の時代であれば、教員として僧侶として、平凡な人生を生まじめに生きたことと思われる。伯父にとっても姪にとっても、中国は思い入れの対象であったが、そのアプローチは文武全く逆方向のものとなった。この方向性の違いは、生まれ合わせた時代の日本の対中姿勢の違いを直接反映したものと言える。

本作業は、これまでのところ、写真などのデジタル処理を終え、遺品全体に一通り目を通し終えたところで、第一段階を終えたばかりと言える。小稿は中間報告としたが、写真などの一次資料の紹介に終始したのが実情である。次の段階としては、異なる時代が一つの家の二世代にもたらした中国へのアプローチの違いについて、大日本帝国期に生きた一青年の教養や認識のあり方について、中国認識や対中姿勢を中心に、日本国期を生きてきた次世代の視点からいささかの考察を加えてみたい。しかし、冒頭に述べたように、近現代史は筆者の専門とするところではない。これらの写真や記事を史料として、専門家による研究に役立ててもらえる機会を持てればと願うものである。

注

〈1〉郷里の家に遺品として残った写真集は全部で一二冊あるが、断片的なものもある。日中戦争従軍に関連していて、比較的よくまとまっているものは、以下の七冊である。作業順に以下の通りナンバリングし、本文中の言及では、これに従っている。アルバム1：個人アルバム。初年兵教育に始まり、豊橋陸軍教導学校での幹部候補生訓練が中心。アルバム2：個人アルバム。豊橋陸軍教導学校での訓練・中国戦線。アルバム3：「支那事変記念写真帖」。奥付に「昭和十五年五月〔非売品〕」とある。軍の各機構や軍事行動の全過程を紹介する写真頁に加え、巻末にはスクラップ用の無地の頁。従軍時の個人写真や新聞切

抜きが多数貼り付けられている。アルバム4：「支那事変記念写真帳」。昭和一六年八月発行。入隊部隊（中部第三十八部隊）の従軍記念集。合祀の碑や神社、慰霊祭の写真に始まり、約一千名の遺影が二〇頁にわたって続く。後半は部隊が参加した作戦過程を紹介する写真。アルバム5：個人アルバム。山西省盂県駐屯中の写真が主体。アルバム6：「Our Life at Komazawa」。駒澤大学卒業アルバム。アルバム7：「回顧」。昭和一六年七月支那事変第四周年の記念品（絵葉書帳）。全頁がタバコパッケージのコレクションで埋められている。

〈2〉 三重県熊野市在住であった山本泉氏。一九四〇年八月から約六年間中国戦線に従軍。自宅の一部を「いずみ資料館」として開放、日中戦争従軍時の大量の写真や支給品などを展示しておられた。二〇〇五年七月死去。秦郁彦『慰安婦と戦場の性』（新潮社、一九九九年）に氏の発言が収録されている。

〈3〉 写真の裏書や添書の引用中、「……」は省略箇所、「□」は不明字や個人名を伏せた箇所を示し、□の数は元の字数に対応している。また旧字体は新字体に改めた。

〈4〉 詳しくは、第二章第二節に後述。

〈5〉 『朝日新聞』二〇〇五年一〇月二一日朝刊「日中学生討論――隣人と語る明日」所載の内閣府世論調査。「中国に親しみを感じる」率は八〇年の約八〇％を頂点にその後は下がり続け、〇四年には三七・六％にまで落ち込んでいる。

〈6〉 駒澤大学開校百二十年史編纂委員会『駒澤大学百二十年――過去からいま　そして未来へ』駒澤大学、平成一四年、四八頁。

〈7〉 三重県健康福祉部長名による「軍歴証明」（平成一八年八月二四日発行）。

〈8〉 小稿脱稿後にあらたに判明した事実もある。これらについては稿を改めて反映したい。

〈9〉 防衛省防衛研究所提供の資料によれば、三重県津に置かれた補充部隊。前掲注〈7〉「軍歴証明」などから、当時は歩兵第三十三連隊の補充隊だった可能性が高い。

〈10〉 南京の南方。アルバム1添書によると、南京に十五師団本部、漂水に一大隊、金壇に二大隊・聯隊本部、句容に三大隊があった。

〈11〉 この時期には、「初年兵掛教官」「旅団幹候下士候教育隊教育要員」の記載もある。

〈12〉 大西昇『沖縄戦記　石部隊の部』（昭和五三年）に「機関銃中隊（田宮隊）――屍の山」の章あり。大西氏は独立混成第四旅団独立歩兵第十四大隊所属の衛生兵だった。

〈13〉 一九四〇年一一月一三日、南京から上海に向かう途上の丹陽駅において撮影。

〈14〉 この点については、愛知大学大学史事務室研究員、佃隆一郎氏にご教示を受けた。

〈15〉 筆者の愛大入学式に同行してきた母は、「うちにここの門で撮った写真がある」などと言いながら、キャンパスをたずね歩き、結局確信が持てなかったものだろう、正門と副門の二箇所で筆者を立たせて写真を撮った。

〈16〉 前掲注〈7〉「軍歴証明」。

〈17〉 一九四二年元旦撮影の集合写真があり、以後の写真の署名や賞状の宛名に登場する。

〈18〉 防衛庁防衛研修所戦史室「第三十二軍戦闘序列および指揮下部隊一覧表」『沖縄方面陸軍作戦』（戦史叢書）朝雲新聞社、昭和四三年。防衛庁防衛研修所戦史室『北支の治安戦（2）』（戦史叢書）朝雲新聞社、昭和四六年。大西昇『沖縄戦記――石部隊の部』昭和五三年。堀井弘一郎「山西省における日本軍特務機関と傀儡政権機構――盂県での性暴力に関連して」（石田米子・内田知行編『黄土の村の性暴力――大娘たちの戦争は

終わらない』創土社、二〇〇四年）。

〈19〉 裏書には全員の姓（日本姓）と軍の階級の記載がある。同日に撮影された「東会里警備隊記念撮影」と裏書がある写真（軍服姿）には全員のフルネームの記載があり、これら二枚の姓が一致する。なお、堀井、前掲論文によると、日本軍は一九三八年に盂県県城を占領、県城には独立歩兵第十四大隊本部が、東会里を含む県内四箇所に村公所が置かれた。村公所や警備隊について、詳しくは同論文参照。

〈20〉 山田十一郎氏。二〇〇五年五月四日、三重県松阪市にて聞き取り調査実施。

〈21〉 一九四〇年に圭川と同じ旅団の別の大隊（独立混成第四旅団独立歩兵第十三大隊）に入隊し、ほぼ同時期に山西省での駐屯経験を持つ生存者の回想に、この旅団の中隊将校は、ほとんどが幹部候補生あがりだったから、「このインテリが、婆婆では威張っていられても、軍隊では星の数よりメシの数がものをいうんだ」ということで馬鹿にしていた。将校よりも下士官の方が威張っていた、とある（内海愛子・石田米子・加藤修弘編『ある日本兵の二つの戦場――近藤一の終わらない戦争』社会評論社、二〇〇五年、六一頁）。直接会った元部下の方々から出る圭川についての人物評、「大人しい人」「僕らと話す時もまともに顔見て話が出来んような人」もそういう状況から来るものかもしれない。また、伯母の嫁ぎ先に届いたため、敗戦後処分されずにただ一通残った自筆の手紙が「隊長となれば、精神的苦労が大だ。本当に痩せた。矢張り部下を取りなすのは金だ」として、親族に送金を乞うものであることも、戦場の意外な現実を垣間見せて興味深い。

〈22〉 詳しくは、堀井、前掲論文参照。

〈23〉 しかし、和服を着ていれば即日本人とは限らず、前掲注〈2〉の山本氏が見せてくれた本人撮影の写真には、和服を来た女性が混じる宴席の写真に「朝鮮人慰安婦」という添書があり、さらに「日本人は高級高い、朝鮮人は多い、中国人安い」と書かれていた。

〈24〉 アルバム4「支那事変記念写真帳」「編纂記」。

〈25〉 安藤達夫『新聞街浪々記――大正・昭和（前期）の侍たち』新潮社、昭和四一年、一九一頁。また、中下正治『新聞にみる日中関係史――中国の日本人経営紙』（研文出版、一九九六年）の巻末資料「補Ⅲ　第二次大戦中の在中国日本人新聞統合について」に「第二次大戦中、軍の指導により、各地の日本人新聞（邦時紙）を統合したが、その大要は次のように行われた」として、華北では『石門東亜新報』『山西東亜新報』（太原）『山東東亜新報』（青島）『河南東亜新報』（開封）の四紙が『東亜新報』（北京）に、華南では、『南京大陸新報』『武漢大陸新報』『徐州大陸新報』が『大陸新報』（上海）に統合されたとしている。しかし、年月日の記載はない。安藤、前掲書によれば、日本敗戦後、東亜新報社は国民政府によって接収されており、筆者は、北京の国家図書館で『東亜新報』の所蔵を確認した。

〈26〉 掲載年月日不明。中部本社発行となっており、名古屋の住所が記載されている。